

2015年1月16日に神戸国際会議場で「つながろうCO・OPアクション交流会」(コープこうべ・日本生協連共催)が行なわれました。参加した全国の生協の組合員・役職員426人は、発災から20年を迎えた阪神・淡路大震災で得た教訓を共有し、これからの東日本大震災への支援や行政・地域の団体と連携した地域社会づくりについて共に考えました。



阪神・淡路大震災当時の様子を伝えるパネルも用意され、職員OBが参加者に説明する場面も。

全国の生協の組合員・役職員
426人が参加

2015年1月16日に開催された「つながろうCO・OPアクション交流会」。交流会の冒頭、日本生協連の浅田克己会長は「今回の交流会を、大震災の教訓を学び、行政・地域の団体と協力した地域社会づくりを考える場にしましょう」と参加者に呼び掛けました。

第一部では被災地生協の代表と有識者による鼎談が行なわれ、復興を進める上で課題となっている住宅やコミュニティ、生活を支える仕事、地域での福祉の担い手不足などの問題について話し合われました。そして、「現在の復興支援や新たに発生する自然災害に対応するために、生協は地域での助け合いの土壌づくりを進めるべき」との考えを参加者全員で共有しました。その後の第二部では、五つのテーマごとの分科会と二つのワークショップが開催されました。

生協が地域の人びとの思いの受け皿になれるように

「地域との共生、協働の取り組み〜平时的ネットワーク〜」がテーマの分科会では、コープこうべ執行

大震災の教訓を学び 復興支援と地域社会づくりを考える

つながろうCO・OPアクション交流会



「支援物資が2,000個しかないときに3,000人いる避難所に持って行くか?」などの質問にYESかNOで選択するワークショップ「クロスロードゲーム」。参加者同士で議論を深めた。

鼎談の様子。左から神戸学院大学 教授 藤井博志さん、みやぎ生協 顧問 齋藤昭子さん、コープこうべ 理事長 山口一史さん。



役員 店舗商品部担当兼シアード長の竹中久人さんとみやぎ生協店舗商品部 商品開発担当部長 伊藤光寿さんから、ネットワークを生かした取り組みとして、東日本大震災でのコープこうべの「メロンパン募金」^{※1}や、みやぎ生協の「食のみやぎ復興ネットワーク」^{※2}の紹介がありました。

「大震災が起こった後は、生協だけが頑張るのではなく、同じように『地域の役に立ちたい』という思いを持っている行政や地域の団体の皆さんと協力することが大切です。そのためにもふだんから関係をつくり、いざという時に協力し合うことが大きな力になります」と竹中さん。そして、行政や地域の団体の「お

役立ちしたい」という思いを受け止め、そのような団体をつなぐことができる生協を目指すべきだと話しました。

ほかの分科会では、二つの大震災から見えてきた課題や高齢化問題への対応、災害時のネットワークなどについて話し合われました。

コープこうべ地域活動推進部 岩井雅之さんは「NPOとのネットワークから学ぶ自立支援と協同組合の価値」の分科会を企画しました。「『地域とのつながり』が重要視される中、地域や海外で活動するNPOとのネットワークをさらに強めることにより、生協の価値や果たすべき役割に新たに気付く機会づくりになるのではないかと思います」と分科会に込めた思いを話してくれました。

行政や地域とつながり 助け合う地域社会を

交流会の最後に、コープこうべ 組合長理事 本田英一さんは「自然災害への対応は、人びとが支え合い、助け合うというまさに生協運動そのものだと思います。これから東日本大震災の復興が進むように、全国の生協で協力し、継続した支援を行なっていきたいと思います」と

締めくくりました。

交流会の参加者は「各地の生協の取り組みを学び、震災を人ごとではなく『我がごと』として考えることの大切さをあらためて感じています」「東日本大震災の支援の進め方や、新たに災害が発生したときの対応のヒントをもらいました」と話します。

特定の地域に高齢者が集中し地

域のコミュニティーがうまく築けない、被災者の生活の復興にも収入による格差が生じてしまっているなど、二つの大震災で顕在化した問題は、現代の地域社会が抱える課題でもあります。これからも行政や地域の団体と生協がつながり、支え合い、助け合う地域社会をつくっていくことが求められています。

震災の記憶と教訓を次世代に語り継ぐ 「震災体験継承プロジェクト」

震災体験を語り合いましょ！

コープこうべでは、阪神・淡路大震災から20年を迎えるにあたり、発災当時に職員が何を考え、行動したのかを知り、その教訓を未来へ生かそうと「震災体験継承プロジェクト」を立ち上げました。「つながろうCO・OPアクション交流会」に先立って行なわれた「阪神・淡路大震災20年のつどい」で、プロジェクトに参加した若手職員5人は、全国生協の組合員・役職員の前で自分たちの誓いを発表しました。



「震災体験継承プロジェクト」メンバー
コープこうべ協同購入センター
姫路東地域担当
小池真名美さん

震災体験継承プロジェクトでは、震災を経験したたくさんの先輩方にお話を聴きました。特に印象的だったのは、竹本成徳さん（元コープこうべ理事長、元日本生協連会長）が「普段から『さすがコープさん』と地域の皆さんに思っていただけのような行動を取りなさい」とお話しして下さったことです。震災の教訓だけでなく、協同組合で働く上での基盤も教えていただきました。

私はプロジェクトを通して、震災体験につ

いて日々語り合うことが大切だと思いました。聴くことで震災を知ることができ、語ることで忘れていたことを思い出します。「天災は忘れたころにやってくる」という言葉を耳にしますが、災害を風化させないためには語り合い、語り継ぐことが必要です。震災体験継承プロジェクトも、今後はコープこうべの研修の場などでより多くの職員が語り合えるような活動にしていこうと、メンバーと話しています。

※1 コープこうべのPB「コープス神戸ハイカラメロンパン」の供給金額の一部(1個につき1円、ハイカラメロンパンミニは1袋につき2円)を、被災地支援活動に寄付するという募金活動。

※2 宮城県内の農業・漁業関係者や食品関連産業者が、商品づくりや商品利用を通して宮城県の食産業の復興を目指す取り組み。